

近代国民国家とジェンダー Modern Nation-States and Gender

江原由美子
EHARA Yumiko

1. はじめに

江原と申します。今日は「女性と政治」というシリーズの3回目ということで、最初に阿部先生にも申し上げたのですが、私自身は社会学が専門で、特に政治に関心を持っている人間では決してないんです。どちらかというと、最近2年間ぐらいは生殖技術についていろいろ調査をしたり、体外受精という新しい生殖技術が出てきて、実際に経験した人たちの意見をヒアリングしたり、東京都民の意識調査をしたり、あるいはジェンダー意識についてやはり都民に調査を試みたり、そういうようなことをいろいろな機関の調査にかかわる形でやっています。最近では、30代の未婚男性、未婚女性の意識調査をやらせていただいたりして、どちらかというと、一般的な普通の人たちの意識に焦点をあてて仕事をしております。だから、政治家の実際の現状とか、日本の大臣たちが何を考えているとか、選挙制度がどうなったほうがいいのか、女性の投票率だとか、そういう意味での狭義の政治は、新聞で読んでいる皆さんよりも知識が少ないのではないかと思います。

でも、今日ここに呼ばれましたのは、先ほど阿部先生から紹介していただきました『フェミニズムの主張』（勁草書房）という5巻のシリーズの编者だからだと思います。今年の10月には、その最終巻である『フェミニズムとリベラリズム』（勁草書房、2001年）という本も出まして、完結したわけですね。このシリーズの本の作り方はたいへん変わっているとまわりの人からは言われました。普通は、先生方に無理してお願いして書いていただ

くものですから、编者というのは、書き手である先生方を前書きで誉めるわけですね。ところが、このシリーズでは、编者の私が本気になって論争している。こういう本の作り方をしているのかと批判されたこともあります。でも、やりたいうようにやらせていただきました。第1巻『フェミニズムの主張』（勁草書房、1992年）のときはいろいろ批判が出たり、話題になったのですが、この時一番有名になったのは、橋爪大三郎さんの「売春のどこがわるい」という論文です。それから瀬地山角さんの「よりよい性の商品化へ向けて」という論文。フェミニストが聞いたら怒り出すのではないかというようなタイトルだったんですが、その二つの「性の商品化」に関わる議論が一番有名になりました。第1巻には、他に、生殖技術の問題やミスコンの問題、それから、近代の問題に関連する議論などを収録しました。第2巻が『性の商品化』（勁草書房、1995年）、第3巻が『生殖技術とジェンダー』（勁草書房、1996年）、第4巻が『性・暴力・ネーション』（勁草書房、1998年）というタイトルで、第5巻が先ほど言いました『フェミニズムとリベラリズム』というわけです。

なぜこのような本を作ったかということ、私は若いとき、学部で学生だったころから、田中美津さんたちがなさっていた「リブ新宿センター」に出入りしていたりして、「ウーマンリブ」といわれる運動の時代、実際それが生きていた時代を知っているんです。そういう場所に出入りしていましたから、なかなか強い影響を受けました。しかし、大学院にいくときは、そういうことはあまりやらずに、少しおとなしくしていたほうがいいのかなどと思ひまして（笑）、アルフレッド・シュッツの社会学など、ちょっと別なことをやっていたんです。ジェンダーに関わる仕事をやり始めたのは教員になって、いろいろな意味で女性問題が社会的に注目されるようになってからで、いつの間にやら引っ張られていました。それからかなり長い期間、もう15年ぐらいジェンダーに関わる仕事をしてきました。

そういうことを長くやっていると、簡単には答えが出ない難しい問題が女性問題・ジェンダー・フェミニズムの領域にはあるということが見えてきます。今日も、そういう話をしようと思っています。例えば、「売買春」という問題を例にとりましょう。売春防止法というのは、成人の女性を保

護の対象にしているんです。明らかに、そこには、「売春する女性たちは自分自身について十分な考慮の上で行為している」ということに対する否定的な視線が作動しています。また、売春をする人に対する蔑視という問題もあります。日本の廃娼運動の歴史に関しては、藤目ゆきという歴史学者の『性の歴史学』（不二出版、1997年）という歴史学の本があります。その中の「廃娼運動の昂揚」という論文をぜひ読んでみてほしいのですが、当時いかに運動の中にも売春する女性に対するすさまじい差別意識があったかということが如実に描かれています。一方でそういう問題がある。

しかし他方で、売春は非常に悲惨な問題を含んでいます。日本では、もはやそういう悲惨な問題はないと言う人が時々いるのですが、それは日本社会を非常に表面的にしか見ていないのであって、日本社会も、外国人のかたを中心に、暴力と搾取と悲惨の極みとっていいような売春にからむ出来事というのはたくさんあります。ごく普通的女子学生たちも巻き込まれるような性の商品化にかかわる恐ろしい出来事も山ほどあるんです。先日のことなのですが、かつて私の授業をとったという女性から、アダルトビデオに出演してしまったのだけどフィルムを撮り返したい、なんとかできないか、という相談を受けました。それで、弁護士さんを紹介したりしていたのですが、いろいろな経緯があって、そのご本人が先日結局自殺なさったんですね。事情はよく分かりませんが、御本人にとっては自らの生命を断つという気持ちになる位に大変なことだったのだと思います。

問題を戻しましょう。もう一度言うと、売買春という問題に対しては、一方では売春を否定的なものとして見ることで自体が問題なんだという指摘があり、他方においては、それでも買売春を否定視せざるをえないような悲惨さがある。そのときどう考えるか。難しい問題です。

あるいは、人工妊娠中絶は是なんだろうか、否なんだろうかという議論もあります。これも私はよく分からない。非常に悩む問題です。ある意味で、人工妊娠中絶は、人の命を殺すことです。しかし他方で、女性の視点から見ると、それがなかったらフェミニズムなど絵に書いた餅になってしまう。まったくの画餅です。100パーセントそう言えます。もし自分で生殖能力をコントロールできないとしたら、働くこと、自分の人生を自分で決

めることなど不可能です。これをどうやって考えるべきか。これも一筋縄ではいかない問題です。

この5巻のシリーズを出した理由は、そういう問題そのものにきちんと向き合うためでした。幸いたいへん好評でした。フェミニスト以外の方にもよく読まれた。書いてくださった方は半分ぐらいがフェミニストで、半分ぐらいはフェミニストの側からすれば「反動」といわれるような立場の人たちでしたが、両者の対話をつくってきたつもりです。

2. 女性兵士問題とは？

話の前置きがだいぶ長くなってしまいましたが、その5巻シリーズの4巻目に、『性・暴力・ネーション』という本を出しました。この本が、「近代国民国家とジェンダー」というタイトルで、今日お話することになったきっかけだと思うのですが、この本でどういう問題を扱ったかという、一つは女性兵士問題です。これは、湾岸戦争をきっかけにアメリカで起きた、女性が軍隊内で雇用上の平等を主張すべきかどうかをめぐる論争です。「NOW」（全米女性機構 National Organization for Women）というアメリカ最大の女性組織がありますが、湾岸戦争をきっかけにして、女性も男性と同じ戦闘位置に立って、だから当然同じだけの戦功をあげて、同じだけの危険性を背負って、軍隊内においても男女平等は実現されるべきだということを主張した。この主張の是非をめぐる議論を取りあげました。

日本では、こういう主張はあまりリアリティがないと思います。あまり議論もない。しかし、日本においても、この本のなかにもデータが出てきますが、1997～1998年の段階で、自衛隊における女性の比率は4～5%あります。今は、少し増えてるかもしれませんが。女性の自衛隊員がつける仕事の範囲には、非常に大きな制約がある。それに、採用人数も非常に限定されてますので、採用時の倍率は女性のほうがずっと高いそうです。何倍にもなる、何十倍にもなるということが、この本のなかで紹介されています。しかし、こういう明らかな性差別があるにもかかわらず、日本のフェミニストの間で、軍隊内での男女平等を要求するという話は聞いたことが

ありません。むしろ要求すること自体に対する批判のほうが日本のフェミニズムのなかでは強いと思うんです。他方、アメリカのフェミニストはそのような道をとった（もちろんそのなかでも論争はあって、アメリカの全てのフェミニストが、というのではなく、主流組織がその道をとったということです）。これは、いいのか、わるいのか、これもよく分からない問題です。

市民権という問題（あるいは国民の権利でもいいですが）に関して、フェミニストは、女性は男性と同等の権利があるのだということを主張してきました。日本では徴兵制がありませんけれども、近代国民国家（このチームは後で説明します）においては、歴史的には多くの国が徴兵制をとってきました。しかし、徴兵、つまり軍役につく義務というのは、ほとんど男性だけに課せられてきたわけです。女性には課せられてこなかった。このことは、実は、なぜ女性が市民権を長い間得られなかったのか、なぜ婦人参政権が長い間実現されなかったのかという問題と非常に大きな関連性を持っている。その観点からすると、女性も男性と同じ義務を負わなければならない、本当の意味での男女平等は来ないのではないかというような考え方もできるかもしれない。しかし、他方において、実際に女性が戦闘員になったとして、どれだけその能力を発揮できるのかという問いもある。田嶋正樹さんはこの問題を同じ『性・暴力・ネーション』という本のなかで出しています（「フェミニズム政治のメタクリティーク」）。男性と同じだけのことができないと平等は認められないというロジックが成立してしまったら、かえって女性にとってマイナスになるのではないかと。こういう問題もあるわけです。

面白いことに、一般市民を対象に意識調査をして分かったのですが、女性ってすごいセクシストなところがあるんです。都民を対象にして、犯罪や災害などでいざというときに誰に頼るかというアンケート調査をやったことがあるんです。そういうときには女性は男性に頼るという人が圧倒的に多い。街で恐そうなおじさんが来たらどうするか。自分で戦うという女性はあまりなくて、男の人に助けてもらおうと。基本的にはそういう発想です。本当のことを言って、自分で自分の身を守るという気持ちが非常に

弱いのが今の日本の女性なのではないか。フェミニストのなかには、そういう暴力から身を守るためには自衛力をつけなければならないということで、講座を開いてくださるかたもいます。だから、そういう意識が一般的に低いからすべて女性は低いといったら間違いなのですが、多数派は低い。逆に、男の人はいざとなったら自分だと思っている。女の子と一緒に帰っていて、突然恐いおじさんが出てきたらどうするか。彼女の裏に隠れて逃げるか。男性は逃げない。逃げられない。これが面白いところです。実は、近代の男性ジェンダーというのは、女性ジェンダーをうまく利用して、男を逃げられないような立場においてきた。「男らしさ」というジェンダーは、敵の弾が前から飛んでくるとき後ろに逃げないためにできているんだと言っている人もいます。逃げられたら国が困るから、「逃げるのは卑怯だ」というふうに「男らしさ」を強調するわけです。

こう考えてくると、「男らしさ」や「女らしさ」というジェンダーが近代国民国家の不可欠な装置であることが実にはっきりと見えてくる。先日、「雨の神宮外苑」というテレビ番組がありました。学徒出陣の話なんです。戦争の初めの頃は学生だからということで徴兵を延期されていた学生たちにも、戦争の激化とともについに動員が下ります。それが学徒出陣です。その時、うまいものです、国は。そのテレビ番組を見て初めて知ったんですけれども、観客席に高等女学校の女子学生をたくさん集めるんです。そこに彼らが入ってくるわけですよ。その経験をした男子学生、今はおじいさんですが、その人が言うんです。「父のためでも、母のためでも、国のためでもない、この女の子たちのために命を捨てなきゃいけないと思った」と。それで、彼女たちが涙ながらに、いってらっしゃあい、と言うんです。彼らはその声を聞きながら学徒出陣していった。ここで実にうまく作られているのが、男性のジェンダーと女性のジェンダーです。少し話がずれましたけれども。

このような問題があるわけですが、だからといって女性は平等に戦闘に参加するということは、本当にいいのだろうかという問いも女性の側にはあります。だいたい多くの戦争では、女性は被害者になることのほうが多い。けっして、私は母性主義者ではないですけれども、子を産んだり、育

てたりしているので、人の命の重さはいやというほど知ってます。一人の人間を育てるのは大変なんです。皆さん、お父さん、お母さん、まわりの方たち、あるいは先生たち、おじさんかもしれない、おじいさんかもしれないけど、自分が大きくなるまで、そういったまわりの人たちにどれだけ世話になったか、産むときから始まってどれだけの労働力が自分に注がれたかを考えたことがありますか。考えたらぞっとしますよ。私はこれだけ人がいると怖くなる時があるんです。これだけ産んで育てた人がいたんだと思うと。変な言い方ですが、なんか背筋がぞっとするんです。産みの苦しみや、痛みや、何十時間にもおよぶ陣痛や、その後のつらさや、育てるのにかかる時間や、それらの全てを経て、人間が産まれる。そして、どれだけの眠れない夜や、心配や、時間が注がれたか。一人の人間って本当に人間の労働のかたまりなんです。そういう人間の重さを考えたときに、人の命を簡単に殺す、人の命を物のように扱う戦争というものを、やっぱり嫌だと思う女性が多くいて当然なのではないか。そう思います。だからといって、女性は平和主義者だとは思いません（そういうのを「本質主義」と言います）。女性のなかにも攻撃的な人はいます。しかし、いろいろな女性がいるとしても、女性のかかりの人たちは、やっぱり戦争がきらいです。どちらかというと好きじゃない。多数派は好きではないだろうと思う。なのに、もし女性も平等に軍隊に参加するとすれば、自らが他者を暴力で侵害することを覚悟しなくてはいけない。女性たちは人権を侵害されていると怒ってきたわけですが、自分自身が他者の人権を侵害することになる。人を殺したり、捕虜にしたり、拘束したり、レイプしたり、戦争とはそういう行為ですから。そうすると、そのような戦争に男性と同じだけの権利で参加させようというのはパラドクスだという考え方が生まれるわけです。私が編集した本の中では、これは上野千鶴子さんの立場です。女性も男性と平等に戦争に参加する権利を主張するということはフェミニズムが絶対とるべき主張ではないと彼女は主張するわけです（『女性兵士の構築』）。

このように、『性・暴力・ネーション』で取り上げた問題の一つは、女性兵士問題でした。「性」、「暴力」、「ネーション」というタームに即して説明しますと、「性」は女性と男性という性別、「暴力」は軍隊参加、軍隊が行

使用する軍勢力という暴力です。「ネーション」は、国民国家を意味しています。それにどのように関わるか。これは、私たち、多くのフェミニストの盲点を突くような問題で、論争になったわけです。『性・暴力・ネーション』では、その女性兵士問題を取り上げて一つの柱としました。

3. 性暴力とドメスティック・バイオレンス

しかし、女性兵士の問題だけを取り上げたのでは問題は見えないのではないかという思いがあり、『性・暴力・ネーション』では、もう一つ、性暴力の問題を取り上げました。軍隊の話だけをしていると、やっぱり、どうしても「女性はずるいよ」という議論に負けそうになる。同じ権利を持つことを要求しておきながら「国を守る」という義務は放棄するのか、と。日本は平和憲法ですからあまりリアリティがありませんが、もちろん多くの国では自衛権を行使するのは当然であるわけです（日本でも、自衛権の存在とその行使は当然だという説と、平和憲法は自衛権を含む全ての戦争行為を放棄したんだという説とが入り乱れて、9条をめぐる論争があります）。9条のおかげで、私たちはあまりその問題に直面しないで戦後ずっと過ごしてきましたが、現実のわれわれのまわりの国家は、自衛権を行使する国家です。つまり、「侵略されたらどうする？」という問題はやっぱりあるわけです。無視してもしようがない。考えなければならないことは確かです。しかし、どういうふうに答えを出したらいいんだろう。そのように考えるとき、女性も同等に参加すべきだという議論にどうも負けそうになるんです。性暴力の問題を立ててみようと思った背景には、そういうことがあります。

日本では、性暴力の問題として、従軍慰安婦問題が大きなイシューになりましたが、そこで分かるように、性暴力の問題も、非常に大きな「性」、「暴力」、「ネーション」の問題です。この場合の「ネーション」は、国家です。「暴力」は、性暴力、主に女性に対して行使される暴力です。「性」は、もちろん女性というジェンダーの意味と、セクシュアリティの二つの意味をもっています。そういう「性」と「暴力」と「ネーション」が絡み合う

かたちで浮かび上がってくる問題として、性暴力という問題がある。従軍慰安婦の問題はまた後で論じるとして、まずドメスティック・バイオレンス（家庭内暴力 Domestic Violence = DV）の問題に入ってみたいと思います。

今、ドメスティック・バイオレンスがものすごく大きな問題になっています。私は、あちこちの女性センターにけっこう出入りしているものですから、情報が入ります。「もう、大変なんです」という話ばかりですね。急に相談が増えまして、ドメスティック・バイオレンスのこれまでずっと抑えられていた部分が噴出してきたわけです。問題が増えているというよりも認知が広まったのだと思いますが、DV防止法ができて相談してもいいんだということが分かった。そういう形で、最近DVが大きく問題になっている。しかし、逆にいえば、なぜ最近まで問題にならなかったのかという問い、ありませんか？ 変ですよ。「暴力はいけないはずなのに、どうして今まで放置されてきたの？」と誰でも疑問を抱くと思うんです。

実のところ、DVが問題だということが認識されるようになったのは、世界全体でも割合最近のことです。1993年にウィーン宣言が出て、「女性の権利も人権」ということが言われた。この宣言を聞いたとき、当たり前じゃない、と感じると思うのですが、なぜ今頃こんな当たり前のことを言っているのだろう、と。しかし、それが当たり前ではなかった社会なんです。私たちは、18世紀末の市民革命のときに人権思想が生まれて、近代啓蒙思想、近代人権思想によって近代市民社会ができたのだと教わってきましたが、女性に対する暴力が問題になったのは20世紀の末のことなんです。このことは、確認しておくべきだと思います。

ドメスティック・バイオレンスは、実際の事例でいうと、非常に深刻な問題です。聞いているだけで怖くなるような暴力が家庭の中で起きている。家庭の中だということで、「プライベート」ということになり、暴力が許容されてきたわけです。昨日たまたま、『風とともに去りぬ』の続編を描いた映画を見ました。その中で、こんなことがあっていいのかという場面があって、私は見ながら非常に怒っていました。スカーレットと交際していた男性がいて、その男性が彼女の家で性暴力におよぼわけです。彼女が帰れと言っているのに、暴力をふるって彼女を犯す。そのとき、男性の召使も

女性の召使も側にいるのですが、男が暴力を行使するにおよんで、スカーレットが大声で助けを求めているのに、みんな黙って自分の部屋に引き上げるんです。屈強な男性の召使も自分の部屋に下がっていってしまう。「ご主人様たちのプライバシーには介入しない」と。でも、ご主人様というのは（その話の中では）、スカーレットなんです。単なる客である男じゃない。お客さんの、その彼が主人であるスカーレットに対して暴行におよんでいるんです。なのに、これまで二人は性的関係にあったということで、「現在、ご主人様が暴力を振るわれている」という明々白々の事実が、まったく無視される。話の中では、その男性は悪い男性という設定になっていて、彼女の召使の女性にも手を出している。その女性のほうは妊娠しているのですが、スカーレットが失神している間に、召使の女性が男を刺して殺してしまう。ところが、スカーレットのほうが間違っただけで逮捕されてしまう。裁判のなかで、彼女は殺人罪を適用されてそのまま処刑されることになる。結局、最後には召使が出てきて、「悪かった、私がやったんです」と告白して、スカーレットは見事助かり、レット・バトラーと結婚するという話なので、最後のほうは、まったくおかしくて、お話としてはお粗末なかんじなのですが、私はその裁判にすごく腹が立ったんです。だって性暴力におよんでいた人が殺されたわけで、どうしてそれを単純に殺人と考えられるのか。なぜみんなスカーレットを助けないのか、と。だけど実は、これがずっと続いてきた、近代国民国家における性暴力という問題なんだと思うんです。「プライバシー」には関与しない。性が関与したとたんに、周りの人はひいていく。家庭の中でも、どこでもそうだったのだろうと思います。

20世紀の終わり、1990年代まで、こういうことが現実におきていた。一般のドメスティック・バイオレンスのなかにも、首を絞めるとか、意識を失うとか、病院に駆け込むとか（少数ですが、死んでしまう場合もあります）、そういう暴力が多々繰り返されている。しかし、これまで、重大な傷害や殺人に至らないかぎり、こういう問題に警察は関与しなかった。痴話げんかに警察の関与は不要だというわけです。女性自身の問題も少しはあります。女性は男性に経済的に依存しているから、男性が逮捕されると、その日から食べるものに困るという問題がある。暴力が行使されている間

は逮捕してほしいと言っている、後になって、なぜ捕まえたんだと怒る女性が多い。これが警察のこれまでの言い分です。「DVの仲裁は難しい」と。確かに、それまで警察官の後ろに隠れて「あの人を捕まえてください」と言っていた女性が、突然、警察官に向かって「どうして捕まえるんですか」と言い出すこともある。それはとても繊細な問題のようです。だから、けっして警察だけを責めるわけではない。しかし、そういうことがあったとしても、それを理由に介入しないということがあっていいのだろうか。『性・暴力・ネーション』の中で、大越愛子さんは、「近代国民国家は性暴力容認体制だ」と言っています（「『国家』と性暴力」）。近代国民国家において性暴力は容認されてきた、許容されてきた、取り締まられないまましてきた、と。これは、とてもよくわかります。

例えば、私たちフェミニストのあいだで昔よく語られた事例があります。イギリスでは、今世紀初頭にいたるまで「親指の法則」というものがあった。妻を殴る場合、男性の親指よりも細い鞭ならば、いくら殴っても罪には問われないという法則です。つまり、市民革命後の社会でも、家父長が妻子に暴力をふるう権利は残存したということです。第三世界においては、まだそういうことがあります（全部の第三世界ではなく、一部の第三世界においてですが）。殴るのが常態という報告もあります。例えば、『世界の女性と暴力』（明石書店、1998年）という題の厚い本が出ています。その本を見ると、恐ろしい事例が山ほど出ています。ゼミで学生に読んでもらった時、「先生、しばらく御飯が食べられなくなっていました」と報告者の人が悩んでいました。とにかく恐ろしい記述が山のように出ています。多くの国々では、そういうことが未だに続いていて、有効な対応はとられていない。

4. 女性は「市民」ではなかった

では、どうしてそうなったか。実は、先ほど言った女性兵士問題と性暴力容認体制の問題は、決して別のことではない。私が言いたかったのは、このことです。これは、近代国民国家の根幹に関わっています。まず、近

代国民国家を定義しておきましょう。近代国民国家とは、近代市民革命、あるいは、それに類する改革を経て成立した国家です。これには、いくつかの特徴があります。国家による軍事力の独占、国民主権（市民による政治）、法による支配と人権概念、それから、民族を一つのイメージとして政治的共同体を把握する思想、国家と社会の分離などです。このような特徴をもっている国家を近代国民国家と呼ぶことにします。

では、近代国民国家の国民主権の構成員である国民、あるいは市民とは誰か。フェミニストでなくても知ってますね。近代市民革命のとき、女性は市民としては認められてなかった。女性は市民ではなかった。婦人参政権を得て、はじめて女性は男性と同等の権利をもつ主体になったのです。では、その婦人参政権はいつできたか。市民革命が18世紀だとするならば、婦人参政権は20世紀前半です。1世紀半のずれがある。男女平等を実現したのは、まだ、最近の話なのです。日本が1946年。確かイギリス、アメリカは第1次世界大戦以後だと思います。ニュージーランドは早くて、1893年。いずれにせよ、婦人参政権の確立は20世紀になってからだと思っています。日本は20世紀の半ばですから、まだ半世紀しかたっていない。それまでは、国民主権といっても、女性は主権を持っていなかった。（日本の場合は、天皇制がありまして、国民主権になったのは戦後です。そういう意味では、他の国とは違う問題があって、近代国民国家の様々なバリエーションの一つとして考えたほうがいいと思います）。

国民によって政府が選ばれる、市民が統治するんだということをはっきりと明記してあるような国家においても、その市民に入っていたのは男性だけでした。私たちは、「第一波フェミニズム」、「第二波フェミニズム」という言い方でフェミニズムを歴史的に区分しますが、「第一波フェミニズム」は、こういった法的な不平等の状態を前提として、これをなんとかしようと戦ってきたフェミニズム、婦人参政権運動を中心としたフェミニズムです。それに対して、1960年代以降のフェミニズムは、「第二波フェミニズム」と呼ばれます。今は第二波だと私たちは言うんですが、第二波フェミニズムのなかでよく言われるのは、近代市民革命のときには、人間（man）は男（man）だったということです。人間、人類という言葉と、男という言葉

葉が、英語でもフランス語でも一致しているんです。そして人間という概念に女は入っていない。だから「人権宣言」といったときの「人」とは男で女は入ってない。当時の市民のイメージは、男性なんです。

どうしてそういうことになったのか。ここまできると、リベラリズムという問題に直結していきます。イギリスを主にイメージしながら話をしているのですが、「ブルジョワ」といわれた最初の「市民」は、財産を持ち、誰にも従属することのない独立独歩の人間でした。この「市民」概念には、そのような人間でなければ、理性をもって判断できない、誰かに依存しているような人間は市民として認められない、という考え方が含まれてます。女性は、そのころ財産権を持っていなかった。経済力もなかった。当然、誰かに依存している。だから市民ではない。職業の自立という問題もあります。どちらが先かという問題は、タマゴとニワトリの話に似て難しいですが。女性が市民として認められなかったのは、財産権がなかったからなのか。それとも、財産権が認められなかったのは、そういう市民概念だったからなのか。いずれにせよ、リベラリズムがイメージしている市民は、基本的に、財産を持った、誰にも従属することのない存在なんです。そうすると、女性は当然のように排除されてしまう。

また「市民権」という概念における市民は、今度はフランス革命が一番イメージしやすいのですが、ナポレオン法典以降、市民革命を守る軍隊に参加できる市民を意味していました。フランス革命で共和制の政府ができた。つまり、民衆が自分たちの政体を作ったわけです。ところが、まわりじゅうの君主制国からいじめられたわけです。そして、「自分たちで作った政体を守れ」ということで、徴兵がそこではじめて成立した。国民軍が創設されるわけです。そうすると、政治に参加できる人間は、いったん危うき時には国を守れる人間でもあるべきだということになる。市民には、納税の義務など、さまざまな義務があるが、それだけではなくて、いったんことがあったら血も払うのが市民だと。このようにして、国のために命を差し出せる人間が市民なんだというイメージ形成が行われた。フランスでもドイツでもそうです。これが近代国民国家の市民のイメージがなぜ暗黙に男性だったのかという問いに関わる問題で、今の女性兵士問題にまでつ

ながっています。

では、もう一つの性暴力問題とは、どういう問題なのか？ 市民は、人間と言われながら、実は、男、つまり家長、家父長としてしかイメージされていなかった。そうすると、自立できない、自分で自分の身を守れない、市民でない人間は、家父長のもとにとどめ置かれるべきだということになる。こうなってくると、家庭の中での権限は父親、夫にあるべきだという考えが当然のように前提とされて、そこにおいていかなることが行使されようとも、そのことについては国家は介入しないというふうになる。これが「プライバシー」という考え方の原型です。「国家は家庭に介入せず」という原則はここに始まっています。福島瑞穂さんに言わせると、DV防止法、児童虐待法、ストーカー禁止法の三つは、日本という国が、法はプライバシーに立ち入らず、法は家庭の中に入らずと言う原則をいよいよ捨てたことをはっきりと示す証拠なんだそうです。そういう法の成立が、2000年と2001年。DV防止法は今年（2001年）の10月が施行ですから。そういう意味で、私たちは、近代市民社会の成立以降ずっと続いていた、家父長制の名残の最後の残滓が消えるような歴史的な瞬間に立ち会っているのかもしれない。市民とは誰か、男だ、というわけで、女性は市民ではないのだから、当然家父長の権力のもとにとどめ置かれるべきだということによって、DVもレイプもみんな放置されてきたといっていると思います。

5. 競合する二つの形成力

最後に、国民国家とジェンダーという問題を、民族とジェンダーという観点につなげて行きたいと思います。先ほど、私は近代国民国家という概念を、暗黙に民族を一つのイメージとして政治的共同体を把握するものだと言いました。20世紀になると、その思想は一つの理想にすらなる。例えば、「民族自決」という主張が20世紀になって出てきます。国際連盟のときのウィルソンですね。

今の時代というのは、一方で、地球全体がひとつの政治的共同体にまとまりつつある時代です。おそらくこれから1～2世紀はかかる。地球全体が

ひとつの政治的共同体にまとまるのは、2世紀後ぐらいかなあ、なんて思っているんですけども。私が生きている間には絶対ないと思っていますので、どうせ自分の死後のことだからいいやと、いいかげんに根拠なく言っているんですが（笑）。でも、それに向けての歩みは現に始まっています。一つは国際連合ですし、もう一つは国際的なNGOの組織化、それらが非常に大きな影響力をもつようになってきている。また、多国籍企業です。多国籍企業のイメージと、NGOのイメージと、国際連合のイメージはずいぶん違いますが、いずれにしても、さまざまなレベルで国を超えた組織が生まれている。しかし他方で、現実には政治はまだまだ国民国家が前提になっているのが現代です。

『フェミニズムとリベラリズム』というタイトルで出した『フェミニズムの主張』の第5巻に、塩川信明さんというソ連の研究者のかたにお書きいただいたのですが（「集团的抑圧と個人」）、彼は旧ソ連領のなかでの国家形成運動について触れています。彼が言っているのは、現代という時代はまだまだナショナリズムの時代なんだ、民族自決を求めて戦っている時代なんだということです。これまでソ連の中で抑圧されて政治的にはほとんどロシアに従属させられてきた少数民族の人たちが、自分たち自身の政府と文化ということで動き始めていると。こういう動きにはものすごいものがあって、そのようなことを考えると、けっして国民国家を形成する運動が終っているとは言えない。一方で今作り出されつつある国民国家があり、他方でそれを超えるような組織が作られつつあるわけです。しかし、もう国という政治の単位は徐々に弱まってきている。国ができることは徐々に弱まってきています。しかし、それでは国際連合が一気にすべてを決定する世界統治機構になれるかというと、なれやしません。

先日、世界社会学会会長のアルベリ・マルチネッティさんという人の講演を日本社会学会で聞きました。彼によると、将来の世界像として、EUのイメージと、アメリカのメルティング・ポットのイメージの二つがあるそうです。彼は、メルティング・ポットではないほうの選択肢、つまり、各地域がまとまりながら、それを超える国際的な社会を作っているのがEUだと言っています。マルチネッティさんは、国を超えた組織が将来できあが

るかどうかということにおいて、どういうモデルのもとでそれを考えるのかということの意味は非常に大きい、そのような視点で日本の社会学者もがんばって研究してみなさいという話をしていました。

彼は、本当に今は国を超えた組織ができつつある時代であると言うわけです。つまり、二つの形成力が競合していると。一つは、私たちにとってまだまだ現実であるところの近代国民国家であり、それを形成し、維持しようとする力です。近代国民国家は、暗黙に一つの民族を前提として統治の単位を考える。これが20世紀に2度の世界大戦を引き起こしていくわけです。私は本当に20世紀が前世紀になってよかったと思っているんです。それで21世紀は少しは明るいかなと思ったら同時多発テロが起きて、21世紀も暗いかなという気分なんですけど。しかし、そもそも20世紀の血みどろの戦争とは何だったのか。それは近代国民国家という政治的共同体のモデルがもたらしたと言える。ところが、他方において、近代国民国家は未だ解放のイメージなんです。民族を抑圧されている人間たちにとってはまさに解放のイメージ。その実現のために生命を捨てる人々が大勢いるというその重みは絶対否定できない。しかし、では近代国民国家が本当に普遍的で理想的かということそうではない。絶対にそうではない。例えば、国民国家以前の社会においては、人々は民族単位でなど住んでいなかった。もっと入り乱れている。そういうふうに住んでいた時代があったということ、それが非常に長かったということ、近代国民国家というモデルはそうした人々の暮らしを破壊したということ、それは認識しておかなくてはならないと思います。

6. 人種・民族・国民国家

私は、イスラエルのシャロンって嫌いなんです。ごめんなさい、ぜんぜん国際政治を知らないのにいいかげんなこと言っていますね。単に個人的な趣味のレヴェルなんですけど嫌い。ついにアラファトと話し合いの機会を失うというニュースがありました。私は、心が痛んで痛んで、「もうたまらない」という気分になっています。本当に、ユダヤ国家の知識人はど

んな気持ちだろう、パレスチナの知識人はどんな気持ちだろう、と。あんな泥沼のどうにもならないところに入りこんで、アラブからすれば本当にユダヤ人は後から入ってきた侵略者で、今実際にガザ地区やヨルダン川西岸を爆撃しているわけですから。許せないでしょ。だけど、私たちは、他方において、なぜユダヤ人がイスラエルのような国家を樹立したかという歴史も十分に知っているわけです。日本は、ナチスと手を組み、日独伊防共協定を結びながら、ファシスト国家の一つとして戦ったという歴史を持っていますから。

私、いろいろな本を読んでやっと分かりました。なぜ、ユダヤ人がヨーロッパから追い出されたか。その根源にあったのは、近代国民国家形成運動だと思います。例えば、ドイツ語圏のユダヤ人。ドイツ文化は、ユダヤ人がいなければ絶対に成立しないといわれるほどに、ユダヤ人はものすごい貢献をしていた。では、なぜユダヤ人は徐々にあぶりだされるようにドイツから追い出されたのか。国民国家形成運動です。そのような運動が人種主義、純粋文化主義、宗教、そういうものによって国をまとめようとするときに、人種や文化や宗教が違う人々はどうなるか。あぶりだされてしまいますよね。行き場がなくなったのです。そしてあのような恐ろしい出来事が起こった。

実は、民族の問題とジェンダーの問題は本当に絡んでいまして、近代国民国家とジェンダーという問題系の中の最も大きな問題なのではないかと思っています。それこそ人口史観や富国強兵策と絡むのですが、国民国家形成運動の中で出て来た国民管理術という技術があります。女性に対するコントロールも、その一貫として出てきている。このあたりは、フーコーの仕事思い出してくださってもいいです。そういうような人口に対する視線は、性・セクシュアリティの管理という問題と結びつき、ジェンダーを形成していく。その中で、人種主義も形成されていく。文化主義、言語主義が生物学的な色彩を帯びて人種主義を生み出していく。

人種主義の淵源というのは、ダーウィンの進化論にあると言われてます。ダーウィンの進化論は、女性の婦人参政権運動にとってもすごい害毒を流していて、現代のフェミニストは、ダーウィン進化論から生まれた社

会進化論に関する批判を展開しています。象徴的な逸話を紹介すると、イギリスでフェミニストが婦人参政権を主張したとき、ダーウィンは口をゆがめてあざ笑ったそうです。「科学を勉強しろ、男と女は能力が違うというのは科学的に証明されている、そんなことも知らないのか」と。イギリスの議会に婦人参政権の法案を提出したジョン・ステュアート・ミルに対して、「このミルという男は科学を勉強する必要があるな」とダーウィンが言ったということを紹介しているフェミニストもいます。詳しい話は省きますが、生物学という科学の装いをかぶせられた民族主義であるところの人種主義は、「女性の劣等」と「人種の劣等」を重ね合わせながら証明していく。その意味で、性差別と人種差別のもともとの淵源は一緒なんです。科学的な色彩を帯びた民族主義、あるいは、遺伝学、性科学、医学が、人種主義を形成していく。ヒトラーは実際にそれを採用した。1930年代においてすら前世紀の人種理論は科学的にはまったく古臭いものになっていたはずなのですが、一度作られたものは何十年も生きるんですね。ナチスはそれを採用して、ユダヤ人たちを追いついていくわけです。

そのなかで生き場所を失った人たちが作ったのが、イスラエル国家です。実際にそれを作り上げるためには、ものすごい幸運と、ものすごい努力が必要だった。しかし、そうやって作られたイスラエル国家が今度はパレスチナの人々をその地から追放していく。悲劇が繰り返されるわけです。

繰り返しますが、近代国民国家という理念は、一方で解放の理念です。特に異民族に支配されている人々にとっては。しかし、他方において、少し斜めから見ると、近代国民国家という理念的モデルは恐ろしいほどの悲惨を引き起こしている。私たちは未だその理念がもつ社会形成力の圏域にあります。現在を考えても、アフガニスタンの問題もあるし、日本の貢献の問題もある。日本の日の丸を、やっぱりどうしてもパキスタンに持っていきたい人たちもいるし、アフガニスタンに見せたい人たちもいる。そういう範囲内で生きているわけです。しかし他方において、近代国民国家は確実に終焉に向かっていて。現代において、その歩みは確実に始まっているし、そのことがもう目に見える時代に入っている。その二つが今の私たちの時代に同時進行的に起きているわけです。そのなかでフェミニズムは

どちらの社会形成力に荷担していくのか。どちらの力に自己を位置づけていくべきか。そのことを考えるためには、民族主義や人種主義やジェンダーの関わりを見なければならない。

もう一度繰り返すと、日本の近代国民国家は、暗黙の植民地主義、人種主義をそのなかに内包していた。近代国民国家は、ヨーロッパ起源の思想です。確かに、近代国民国家は、アジア人であり、日本人である私たちの社会の血となり肉となっている民主主義・人権思想・法による統治・そうした理念とともに成立した。それを否定して私たちに何があるか。なんにもないと思う。そうなんだけど、それを作り上げた最初の国民国家の人たちは、暗黙に人種主義を前提としていた。これはまったく明白なことです。なんの曇りもなく証明されることです。それを立憲君主制のような形で取り入れようとした日本も、確実に、ナチス・ドイツと同じような人種主義や民族差別を内包した国家統治のイメージを持っていた。つまり、そこで正式な市民となれるものは、当然その民族に属するものだと思われていた。また、その民族は、民族間競争のなかで生存競争におかれていると思われていた。

近代国民国家は、民族単位の家政治機構を作ります。それを国民主権でまとめるのですが、ナチスなどはそれで政権をとっていく。ナチスは、民族は民族間の生存競争におかれているというふうに言う。そうしたナチスのイデオロギーは、全く現実から浮き上がっていたわけではない。ある種のリアリティがあったわけです。日本だって、食うか食われるかというような形で開国している。生存競争の論理というのは、やっぱりダーウィニズムに淵源があります。そういうものを前提として、例えば、日本は何をしたか。植民地を自ら求めて大陸に進出していった。そういう前提のもとで、戦争が行われる。そのなかで何が起きたか。それは、他国の民衆の殺戮であり、レイプであり、性暴力であり、それ以上にすさまじいことが山ほど行われた。

日本もヨーロッパ諸国も、よく見れば、どこの国家も血塗られてない国なんかない。手を汚してない国なんかないです。だから、イスラエルも大変だが、日本も大変。アラブも大変だが、アメリカも大変。国を経営する

というのは恐ろしいことです。しかし、やらざるをえない。皆さんはまだ、手を汚していないと思っているでしょうが、みなさんが次の日本を担っていくのです。その時どうするか。やむを得ないと、これまでの近代国民国家と同様に血塗られた歴史を受け継ぐか。あるいは、国を超えた国際的な政治統治機構をつくる方向で動かしてもいい。しかし、いずれにせよ、この国民国家と、しばらくはつきあわなければならない。なぜなら、今、統治は国単位でしかない。国は関係ないという人もいるけど、それは欺瞞です。なぜなら、私たちが享受している人権というのは、今のところ国家によって保証されているものだからです。人権概念を否定することなく国など関係ないと言えるためには、それを超える組織を作らなければならない。そのとき初めて、「国は関係ない」市民というのが生まれるのかもしれない。それを作るための努力は必要です。時代状況を説明するためにずいぶん喋りましたが、今はそういう時代なのだと思います。

7. 近代国民国家によるジェンダーの利用

では、このまだ残存している近代国民国家の中で、ジェンダーはどういうふうにご利用されてきたのか。すごいです。一言ではいえない。もうすさまじいといしか言いようのないほど徹底的に利用された。まず、女性と男性に分けるというジェンダーは、「市民」という概念を作るときに非常に有効に作動しました。同時に、その「市民」イメージは国民軍を作るときに上手に作動した。こういう状況のなかで、女性たちはどのように婦人参政権運動をやっていたか。国を守ることができる自立した人間だけが市民なんだ、ということになると、「おまえら女に参政権なんかあるわけないじゃないか」という論にどうしてもなっていく。そのなかで、先ほど言った第一波フェミニスト、婦人参政権を実現しようとした（日本だと主に戦前の）フェミニストの人たちは、男性ジェンダーを前提とした市民像とは異なる市民像を作ろうとする。その市民像とは何か。「母性」を一つのイメージとする市民像、国民像です。国は常に生存競争のもとにおかれていると考えられているわけで、その生存競争を勝ち抜くのは兵隊、あるいは労働者、

つまり男性である。しかし、そういう人を産むのは誰か、女性である。「国家に貢献するのは戦争行為だけではない、兵隊になる子どもを命がけで産むことも貢献である」と。だから「女性をちゃんと扱わなくてどうする」、「女性の意見を聞かなくてどうする」という形で、第一波フェミニストは、女性だからこそ参政権がいるんだという議論をしようとします。そのあたりは今になると、ものすごい批判があります。第二波フェミニストは、「第一波フェミニズムは結局のところナショナリズムに飲み込まれた」とよく言います。あるいは優生思想の持ち主だといった批判をします。批判の対象になるのは、平塚雷鳥や高群逸枝、ヨーロッパだと、ドイツのヘレーネ・シュテッカーです。それはそのとおりなのですが、しかし他にどんなふうな道をとリエたのかと思ったりもする。そのような社会のなかで、いったい他に何ができたのだろうと。しかし、まさに、それは国にとっては都合がよかった。参政権なんてやらないままにしておいて、参政権欲しさに、女性たちが自発的に「母性主義」に陥るのを利用してればよかった、女性を母性として称揚し利用していけばよかったのだから。国民国家としては、「女性＝母性」という自己定義の実践は、喉から手が出るほど欲しいことだったと思います。直接国民を掌握する技術として利用できるから。国民の身体、強い身体を国家が掌握しようとする際に、母性を強調することは、女性のほうから国家に寄っていくようなものです。「私たちは、国のために子供を産みます。だから国のために役に立ちます」と女性が主張する。そうすると、国家の方は、「そうですか、それだったら、ぜひ強い兵隊を作るために努力してください。良い教育をしてください。それでこそ国のためになる模範的女性です」というふうになりますから。

実のところ、女性運動の中には、この第一波フェミニズムの母性主義や優生思想の影響がつい最近までありました。私がフェミニストをやっている時ですから、せいぜい10～15年ぐらい前だと思います。ある時、地方の新聞記者から電話で問い合わせを受けたことがあるんです。「ある婦人団体が『不幸な子を産まない、産ませない運動』というのをやっているのだけど、江原先生、いいんですかね」と。私は、やめてもらいたい、と言いました。「不幸な子」とは誰かということ、障害をもつ子供なんです。婦人会主

催でやっているのですが、会のはじめに、みんなで唱和するというんです。「不幸な子を産まない、産ませない」と。それを見た新聞記者が、「ちょっとこれ優生思想じゃないの、信じられない!」と思って電話してきたのがこの出来事だったわけです。この運動は、婚姻外の子供も産ませないということを言っていて、「コメントをください」というので、私も「おかしいよ」とコメントしたんです。つまり、人々を掌握したい国家と、他方、平等を求める人々の間で、ジェンダーが利用される。両方が手と手を携えたかたちで、近代国民国家におけるジェンダーのダンスが進行したんです。そして、それがファシズムを作っていく。

8. 従軍慰安婦問題

面白いことに、日本ファシズムやナチズムやイタリアのファシズムは、本当にジェンダーをきれいに利用しています。アメリカは利用していないわけではないのですが、やや弱い。アングロサクソンはやや弱いです。どれだけ第二次世界大戦で女性を兵隊として徴用したかということになると、はつきり違います。日本は一度もできなかった。しなかった。ジェンダーが強いんです。「皇軍」のイメージ、男らしさのイメージが関与してくる。大越愛子さんがもっと微妙な分析をしているので、ぜひそれを読んでみてください。彼女は天皇制の問題がきいているんだと言っています（「国家」と性暴力）。天皇性が、私的なもの、公空間ではないプライベートな空間を作る。そこに微妙な日本の「皇軍」イメージがあるのだと言っています。ジェンダーと日本ファシズムのイデオロギー分析は、ものすごくおもしろいと思います。

ドイツでは、ジェンダーの問題以外にセクシュアリティの問題もナチズムに深く絡んでいる。例えば、ナチスは、はっきりとゲイ差別をしている。ゲイの人はホロコーストで虐殺されています（ユダヤ人だけでなく、障害者、ジプシー（ロマ）、社会主義者もかなり虐殺されました）。ドイツでは、そういう形ではっきりとゲイの人に対する差別が見えるのですが、日本だとそれははっきりしないということを言っている人もいます。だから、同

じファシズムというイデオロギーであっても、この三者は微妙にニュアンスが違う。これはおそらく近代国民国家のジェンダーの利用に差異がある。それが私たちの社会における政治イデオロギーに暗黙の色彩を与えているはずです。

女性と男性というのは、非常にわかりやすい比喩なんです。ジョン・スコットという人が言っています。あらゆる政治的な比喩というのは男女の比喩を用いてなされることが多い、と。だから、征服と性行為が重ね合わせられることが多いんです。支配すること＝レイプすること、とか。ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』（岩波書店、2001年）を読んでいる最中なのですが、面白いですね。ダワーが指摘しているのですが、アメリカ人による敗戦以前の日本国民のイメージは、「狂信主義的な天皇主義者の男」で描かれている。ところが、戦後、占領軍がくると、ぱっと変わって、日本人の姿は「芸者」で描かれる。日本国民のイメージが変わったらしいんです。日本国民のイメージが、女性性をまとして女性のイメージで描かれるようになった。それは、はっきりした支配の刻印です。

別の漫画では、芸者さんと、当時「パンパン」といわれた米軍相手の売春婦が米兵と手をつないで歩いている。そこにぼろぼろの日本軍の男が杖をついて呆然と立っている。自国の女を取られても、手も出せない情けない男として「日本人」が描かれる。これは明白に男性中心主義の描き方です。このように、国と国のイメージは、女性と男性のイメージで描かれる。これは、支配だとか、どちらが強いとか、勝利とか、上下関係とか、そういうものを描くときに必ず使われる比喩なんです。こういう比喩が近代国民国家に特有のものなのかどうかは分かりません。もっと古代まで遡ってもあるのかもしれない。私も悩むところなんです。しかし、少なくとも、近代国民国家においてはあった。それは絶対否定できない。

それがどういう形で現れるか。日本の帝国主義的侵略戦争、あるいは占領地支配に必ずついてまわったのが、従軍慰安婦の問題です。「従軍慰安婦というけど、その当時は公娼制があったのだから、それは単に公娼にすぎない」とか、いろんな議論がありますが、そのときの法律体系のもとで合法だったかどうかという議論も、もちろんきちんとやるべきだとは思いま

すけれども、出来事そのものを見たら、「合法だったからいい」と誰が言えるのかというほどの、すさまじい悲惨さがあるわけです。当時は合法だったからということで、私たちは社会主義者の投獄や、拷問による獄死をいいますか。言えませんね。歴史というのはそういうものです。少なくとも今知られている事実の中に、それこそ正当化することなど、どうやってできるのかというような事実があるのは確かだと思います。

では、どうしてそういうことが引き起こされてきたのか。一つには、国内における日本人の女性に対するジェンダー意識がある。女性は家長のもとにあり、産む道具である、あるいは、性のはけ口である。日本の国内で女性をそのように扱ってきたということがあるわけです。

それではなぜ、従軍慰安婦は日本人女性ではなかったのか。「もし日本の兵隊が日本の女性たち、自分の妻や自分の恋人が従軍慰安婦として徴用されていることを知ったら誰が戦うか、だからダメなんだ」という話がありますね。これはものすごく本音の話ですね。恐いぐらいです。しかし、この話を追っていくと、もっと本音のところに差別意識が見えてくる。慰安婦の値段は白人女性が高くて、次いで日本女性、その下に、韓国や中国の女性となっていたそうです。ここには日本人の民族差別、人種差別意識が明白に、あまりにもあからさまに示されていると思います。また、朝鮮半島、あるいは満州地域で日本人は特権階級を形成していた。この差別意識が女性に向かっていく。つまり、相手の国の女性を支配することによって、自分たちが支配者であるという気持ちを満足させたいという欲望や幻想があったのではないかとはいえませんが、なかったとは思えない。そういうことが、戦争をある意味で隠れ蓑にして、植民地の女性たち、被占領地の女性たちに、本当に、刃のように突き刺さっていった。そういうことが生み出したものが従軍慰安婦問題だったのではないかと私はそう思っています。

沖縄では、学校、官舎、裁判官宿舎などが慰安所になっている。軍の関与なしで、どうやってそんな公的な施設を占領できたのか。慰安所設置には大きな力が絡んでいる。日本軍は関与している。少なくとも、間接的に協力しているということはかなり確かなことだと思います。そうでなければ

ば、そんなことは起きえません。もちろん、そういうことが非合法だったのかどうか、直接、軍隊の中にそれが命令としてあったのかどうかという問題は歴史家ではないから分かりませんが、いろいろな間接証拠で見ていくと、軍がかなりの影響力を行使していたことは確かです。

なぜそうだったのか？ 従軍慰安婦問題の話をする、どの社会でもそういうことがある、と反論する人がいます。確かにそうです。どこの国にも、それに類似したことはあります。藤目ゆきさんが指摘しているように、ヨーロッパでは公娼制そのものが近代国民軍、常備軍の創設とともにできあがっている。つまり、公娼制は近代国民国家と共に生まれた（日本は少し違って、近世、江戸時代からの悪所という伝統を利用しながら、むしろヨーロッパに合わせるために、合わせるような形で、公娼制を作っています）。そういう意味では、日本の従軍慰安婦に類似の問題というのは、他の国もあります。だから日本だけの問題ではない。しかし、私が言いたいのは、「他の国もやっているからいい」ということにはならないということです。この問題の中には、我々の心の中にある民族的・人種の差別意識に絡んでものすごく重い問題がある。そういう差別や支配という出来事そのものにジェンダーが絡んでいる。ジェンダーと近代国民国家における民族主義・人種主義は、互いに互いを支え合ってリアルなものとして私たちの前に現前しているんです。近代国民国家とジェンダーの問題はこれほどまでの重さを孕んでいるのだということを強調しておきたいと思います。

9. フェミニズムと近代の再検討

今日は、軍隊内の男女平等という問題から始めて、性暴力の問題、夫婦間レイプの問題、従軍慰安婦の問題というふうに繋いで考えてきました。私が今日言いたかったことは、それらの問題は実は緊密な関連のなかにあるのだということです。一つ一つが別の問題なのではなく、からみあっている。しかも、ジェンダーの問題を追っていくと、全部今の問題なんです。論争として取り上げたものは、今起きている問題であって、現代、つまり、私たちの時代の話なんです。だから、YES／NOをどう考えるべきかを突

きつけられる。そして、それをどんどん追い求めていくと、どこにぶつかっていくか。少なくとも近代の出発点にまで遡ってってしまう。いったい近代とは何だったのか。近代国民国家とは何だったのか。私たちは、それをどのように精算し、どのような方向に向かって明日を歩むべきなのか。こういうことが、ジェンダーの問題を考えるとときには、もう避けて通れない問題なんです。私の時代にそうであるということは、皆さん自身が実際にこの社会を担っていくときには、もっとそうだろうということは明らかです。

「女性と政治」というと、女性議員とかそういう問題の話になりがちです。もちろん、それは重要なポイントだと思います。女性の政治参加や、女性政治家の活動、そこには様々なジェンダーの問題が関わっていますから。しかし、このジェンダーの問題というものは、そこからもっともっと広がる、つまり近代史全体をも含みこむような大きな問題につながっている。しかも、それは、それが良かったのか悪かったのかという議論の決着も未だついていないような問題で、そういう泥沼の中にジェンダーの問題はある。私が『フェミニズムとリベラリズム』という最終巻で出した結論は、そういう結論です。身体を使用する権利は誰にあるのか。性は個人によって処分されるべき問題なのか、そうではないのか。国家によって性が篡奪されてきたことが問題だとしても、それでは個人が性を処分できていいのか。生殖に対して社会はどれだけの介入権をもつのか。優生思想はどこまで払拭できるのか。暗黙にわれわれは優生思想のなかに生きていないか。軍事力の行使はどこまで許容できて、どこから許容できないのか。また女性は、それにどこまで参加すべきなのか。全てそれらの問題は、社会的合意があるわけではない。全員が、YESでもなくNOでもなく、分かれている。そういう問題です。

フェミニズムを考えていくということは、近代が答えを出さなかったいろいろな荷物を全部ひっくり返して、「ほらこれがわからない」、「これもわからない」、「労働ってなに」、「身体ってなに」、「権利ってなに」、「人権ってなに」、「法による支配ってなに」、「国民主権ってどこにあるの」というように、パンドラの箱を開けていく作業に等しい。だから、まだまだや

ることはあります。

皆さんは「フェミニズム嫌い」だと聞きました。なんか怖い人が来て怒られる、そういうイメージがあると伺いました。しかし、フェミニズムを考えるということは先に述べたようなことを考えることなんです。もちろんフェミニズムだけではない。民族を考えていく、ナショナリズムを考えていく、障害者の問題を考えていく、階級の問題を考えていく、みんな類似した問題で、パンドラの箱を次々と開けていくような過程だと思います。そういうものの一つとしてジェンダーの問題はあり、「女性と政治」という議論の枠組みというのは、もうとてつもなく広く、またかぎりなく刺激的であると申し上げて、お話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

* * *

質疑応答

——江原先生は、挑発的な意味で解説されたのだと思うのですが、僕にはあまりにも近代国民国家が悪者にされすぎているように聞こえました。世界国家を樹立すれば、あたかも全ての問題が解決するかのように聞こえましたが、僕にはとてもそうは思えません。むしろ、ねばりづよくこの人間社会とつきあっていくということのなかに、問題解決の糸口があるように思います。その点に関していかがでしょうか？

近代国民国家を悪者にしたつもりはあまりないのですが、ただ視点を現在からやや遠く離れた時点に設置してみると、近代国民国家の理念と現実が見えてくるということはあります。私の歴史認識はそういう感じです。しばらくの間、われわれは近代国民国家のなかで生きねばならない。だとすれば、それにはきちっとした形で参加すべきだろうし、その中で、例えば、男女平等なら、男女平等を実現したり、その中での人種とか、民族とか、エスニシティとか、障害のあるなしとか、階級による差異とか、そう

いう問題を一つ一つ粘り強く解決していくというような方向は十分考えられるものだと思うんです。しかし、その立場に立つだけでよいのかということが、問題提起としてお伝えしたかったことであることは確かです。

私が編纂した本のなかでは、フェミニズムは国民国家に貢献すべきではないという主張の人がかなり多くいました。例えば、上野千鶴子さん、岡真理さん、大越愛子さんなんかはそうです。つまり、国民国家のなかでジェンダーがどのような形で利用されてきたのかという問い自体が、国際的なNGO団体や国際的なフェミニズム（グローバル・フェミニズム）の中で問われているんだ、だとすれば、私たちがやるべきなのは、「国民国家を裁判に引き出す、法廷の場に引き出すことである」と。私はそれも一つのありうる主張だと思います。

例えば、従軍慰安婦問題を、国民国家の枠だけで考えて、合法／非合法という議論だけで論じていいんだろうか。私は少しずるいのですが、立場を少しずらして、歴史的に後の時代に属する人間として、後知恵的なところから、普遍的人権主義の立場から、その歴史的事実を見たとき、そこには許せないものがあるという話をしました。そのような言い方ができるということは、やはり、枠をこえた何かに依拠して話しているんだと思います。自分の中にもいろいろあるんですね。そういう意味で、自分の中でも答えが出ていない。どっちがいいのかなと。しかし、しばらくは、そういう時代が続くと思う。ですからご質問のように、まさに近代国民国家の枠の中でしっかり考えていくということは非常に誠実な態度だと思います。

選択肢を明示化しよう、ということを世界社会学会の会長さんはおっしゃっていましたがね。もし、今、国際連合みたいなものを政府として見るなら、私たちはそこに代表も派遣していないし、選挙もしていない。国連は、政体としては国家とはまったく違うわけです。だから、国連のような国際的組織が政治的統治機構になるためには、今とは全く違う制度にならなくてはいいけない。では、そういうものに、どうやって近づけられるんだろうか。そういうことを一つ一つ構想しなくてはならないということを彼は言っていました。

国家はしばらくは続きますが、私は今は国家が徐々に弱くなる時代に向

かっていると考えています。しかし、私は統治がないままに理想社会が来るとは思えない。その意味では、私はアナーキストではなく、現実主義の人なんです。統治というか、なんらかのガバメント（government）が必要だと思っているんです。だから、国際的な何らかの組織というものを前提としている。統治機構がなくても大丈夫だということもあるかもしれませんが、今の現実を見ると、とてもそうは思えないというのが私の立場で、そこはもう少しリアリスティックに考えるべきだと思っています。ただ、リアリスティックな考え方からしても、国民国家の枠の中で処理できることは徐々に減っていきます。

何度も言いましたように、私は国民国家を悪者にしたつもりはないんです。ある意味で国民国家は解放の理念であり、ある人たちにとっては当然、必要なものです。それが無いがゆえに、どれだけの抑圧が起きるかということを、例えば、ユダヤ人は認識したわけです。自分たちの民族にもとづく国家というものを作らねばならないと。国籍やパスポートが持つとてつもない重さですよ。それがなかったがゆえに、どれだけの人々が死んでいったか。難民という形で流出している人々がどれだけの苦しみを味わっているか。そう考えた時、言語や文化を共有する人々が政治的共同体を組織する国民国家を手にかけているということがどれだけ重要なことか十分理解しているつもりです。にもかかわらず、確実に国家は現実には弱まっていると思うんです。国家単位では解決できないような方向に世界はどんどん動いている。国民国家を統治機構の最終形態とみないほうがいいと思います。それを超えているものが生まれつつある。それとの絡みのなかで、今の現実の政治、つまり国単位の政治を見ていくことが重要ではないでしょうか。

企業が多国籍化すれば、国と経済は完全に分離します。日本の中で生まれた企業が儲かって、日本国民が飢えるということはいくらでもあります。今現実起きていますから。日本国民は飢えていても日本の企業は世界で生き残りました、ということは起きうるわけです。多国籍企業とはそういうものです。そういう動きはどんどん加速していて、国のなかでコントロールできなくなってきた。国家は弱者の溜まり場になるという説もありま

す。国家にしか頼れない人たちが国家に残る。社会保証などは国単位ですから。それに対して、国家を超えたほうが儲かる人たちは、どんどん国家の枠を崩していく。このように、弱者が国家主義を担うという説すらある。そういう情況が刻々と近づいているんです。それがだめだとは思いません。福祉や社会保障の制度を維持していくということは、大事なことです。しかし、国家を支えようとするのが弱者しかいなくなるとすれば、それは早晚作り替えられるというリアリズムも持っておく必要があります。弱者の頼りの綱としての国家だとすれば、国家はもっと強い人間たちに吹き飛ばされるかもしれない。そういう多様なイメージのなかで、近代国民国家の死滅を想像しながら行動してもいいのではないかと。ただ、死滅というのは、2世紀も先の話だと私は思っているので、けっこういい加減なことを言っているかもしれません。しかし、少なくとも私たちは、近代国民国家の終焉がそろそろ見えてきた時代に生きているのではないかと思います。